山崎郷土研究会報
NO.44
49.11.20
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩（五）

二、池田輝澄時代（続4）　島田　清

前稿に続き、『存採叢書』中の「寓簡」に収められた「池田輝澄之記」の続きを掲げる。

〃元和元卯暦二月五日、良照（マヽ）院殿逝去、華光院殿宝春日敬ト号ス。右、十万石之内、宍粟郡四万石を四男左近ニ被下、赤穂三万五千石ヲ五男岩松ニ被下、佐用二万五千石ヲ古七郎ニ被下。岩松、後ニ右京太夫政綱ト云。従四位。寛永五年八月廿九日卒去。古七郎、後ニ右近太夫輝興ト云。従四位下。政綱赤穂郡三万五千石、輝興ニ被下・輝興佐用二万五千石ヲ輝澄ニ被下、都合、宍粟・佐用二郡ニ成ル。〃

江戸時代に入り、山崎藩が漸く創始されることとなった。例によって説明を加えておこう。

慶長一八年正月二五日、姫路城主池田輝政が薨じたあと、播磨の所領五二万石の内、四二万石は嫡子利隆に、残り一〇万石は夫人督姫に分け与えられ、督姫は、これを実子忠継の所領備前二八万石に加えて合計三八万石とした。しかし、督姫は、元和元年（一六一五）二月四日、二条城で急逝し（年五一）、忠継も同月二三日、岡山城で卒去した（一七才）。忠継には妻子がなかったから、次弟忠雄（当時、淡路六万石の領主）に継がせることとなったが、この決定が出たのは、大阪夏の役が終ってより一カ月半後の六月二八日であった。（淡路の六万石は

目次

近世初頭の山崎藩（五）　島田　清　一
長水軍記（四）　作者不詳（四）　三
閑斎神社奉納詩　桧垣賀陽　五
池田悦元家中人数帳（一）　八
郷土だより　一〇
おことわり　一二
本会総会予告　一二

収公）。忠雄は、この時、幼い同母弟の将来を考え、一〇万石を三弟に分け与えたいと願い出た。幕府は、いずれも家康の外孫であることを考慮し、その乞を容れて宍粟郡三万八千石を四男左近、赤穂郡三万五千石を五男岩松、佐用郡二万五千石を古七郎に与え、それぞれ一家を興させた。忠継に対しては、このとき、改めて備中国浅口・都宇・窪屋・下道の四郡、三万五千石を与え、合計三一万五千石を領させた。このときの年令は、忠雄が一四才、左近が一二才、岩松が一一才、古七郎は五才であった。

輝澄は、慶長九年四月二九日、姫路城内で生れ、幼名を松千代といった。のち、左近と称し、同一四年四月、駿府城において家康に謁し、松平の称号を授けられた。

元和元年三月、大阪夏の役が起り、利隆は四月八日、兵二万をひきいて兵庫に至り、ついで尼崎に陣を進めた。家康は、五月五日、秀忠とともに京都を発し、大阪に赴いた。輝澄もこの中に加えられていたが、五月八日、大阪城は陥り、秀頼母子が自殺したので、家康は二条城へ、秀忠は伏見城へ引きあげた。利隆と忠雄は一〇日に上洛し、家康・秀忠に謁して戦捷の賀を述べた。

輝澄は、この後、六月六日、従五位下に叙し、石見守に任ぜられ、六月二八日に宍粟郡を与えられた。

次で、元和三年一二月、従四位下に叙し、山崎を居城とした。

赤穂郡三万五千石を与えられた政綱は、慶長一〇年、姫路城内に生れ、幼名を岩松といった。七歳になったとき（慶長一六年）、家康に謁して松平の称号と新藤五国光の短刀を与えられた。元和元年六月二八日、赤穂郡を領することとなってから、郡内苅屋城に居り、元和九年七月一九日、従五位下、右京太夫に任ぜられ、寛永三年（一六二六）八月一九日、従四位下に進んだ。しかし、同八年七月二九日、二七才で卒した。諡を雲竜院涼岫蔭公という。嗣がなかったので家は絶え、領地は忠雄に返し与えられようとした。しかし、忠雄は、輝澄・輝興の領邑が未だ豊かでないことを述べ、二人に分け与えられるよう願い出た。この結果、輝興には一万石を加増して赤穂郡に、輝澄には二万五千石の佐用郡を加え、計六万三千石として山崎に居らせられた。

世の中はうまくゆかないもので、弟思いの忠雄はこの翌九年四月三日、疱瘡を病んで江戸藩邸で卒した。まだ、三十一の若さであったし、いわゆる伊賀越道中双六で名高い荒木又右衛門・渡辺数馬の仇討事件の発端が起きたばかりの時期であった。忠雄の遺言が、〃河合又五郎の首を墓前に供えよ〃であったのをみても、この時の怒りの程が察せられる。

この事件は、のち、多くの実録や講談に書かれ、また、

伊賀の上野には鍵屋の辻に標識や資料陳列所もつくられて人口に膾炙しているが、参考のため、大要を求べておこう。

寛永七年（一六三〇）七月二一日、忠雄が扶持している元安藤対馬守重信の家臣、河合半左衛門の子、又五郎が、池田家の家臣、渡辺数馬の弟源太夫を斬り殺して江戸にのがれ、旗本の安藤治右衛門に身を寄せた。忠雄は、又五郎の父半左衛門を捕えて質とし、旗本の久世三四郎・阿部四郎五郎の二人を介して治右衛門に又五郎の引渡しを求めた。しかし、治右衛門はこれに応じないばかりか、久世・阿部の両旗本も忠雄を欺いて半左衛門を奪った。忠雄は大いに怒り、近親の諸侯もこれを助けた。一方、旗本も党を組んで対抗し、江戸市中は一時、騒然とした。老中たちは取扱いに苦慮していたが、幸か不幸か、忠雄が急死したので、事件はそのまま放置された。しかし、弟の仇を討とうとする渡辺数馬は、姉婿荒木又右衛門の助勢を得、遂に、伊賀上野城下の鍵屋の辻で河合又五郎を討ち取ったのである。

以上が事件の概要である。忠雄の急死は、この事件の最初の段階のときであったし、事件落着後、荒木又右衛門は池田家に仕え、鳥取に移った。墓も同地にある。

輝澄の兄忠雄には光仲・仲政の二子があり、光仲は幼名勝五郎、のち相模守に任じ、家を継いだ。しかし、幼少であったため、同年六月一八日、因幡・伯耆両国三十二万石に封ぜられ、鳥取城主となった。元和二年（一六一六）利隆が薨じ、その翌三年に鳥取城へ移っていた嫡子光政は光仲と入れ替りに岡山城へ移り、両家とも、そのまま明治維新まで続いた。

いま、寛永一〇年当時の播磨国内諸藩の石高を通覧すると、筆頭は、本多忠政・忠刻父子の治める姫路藩二五万石、第二が松平康直・光重父子の明石藩七万石で、松平輝澄の山崎藩六万三千石はそれに続く第三位であった。山崎藩全盛時代もこのあたりにあった、といってよかろう。

書道用品
結納用品
志水成文堂
山崎町さつき通り一丁目
電話 ②〇五四七・四三〇五

長水軍記（四）

作者不詳

宇野下総守政頼籠城の事

香山の軍勢五十波村に着ければ、附近の農家に触を廻して謂へるよう、長水城へ兵糧を運ぶこと、米壱石に至るものは、烏目三百文を与へんと伝へければ、立処に人夫五、六千人集り、我も我もと兵糧を長水城へと運びけるが、暫くにして壱万五千余石を運送せり。其後処々の倉庫にある金銀財宝を悉く百姓共に附与し、家屋も残らず焼払いて、天正八年四月十一日の暮方長水城へ籠りける。

柳々も長水城は、知行拾五石にして、其地形たるや、東は五十波山に連りて五十波村及揖保川を望見すべく、西は、断崖絶壁数百仞にして下牧谷村を望むべく、南は、山々相連ること弐拾余町、其坂路を下り麓に人家あり生谷村という。北方は、山嶽重々として都多山に連る。其高さ僅かに三十町に過ぎざれども、要害の堅固なること播州第一の名城なり。

却説も宇野下総守政頼は、作州吉野郡大原の城主新免伊賀守へ使者を以て申し遣しけるは、政頼今度羽柴秀吉と戦いを交へしに、秀吉は数万の兵馬を以て将に我城塞に押寄せんとする形勢に有之、就ては、大兄上より中国の毛利家へ援兵を出す様、御斡旋の方を相煩し度しと申し遣しければ、新免伊賀守は、早速之を承諾し、使者を以て毛利家へ援兵の事を申し遣し、自分は一族家臣を集め、宇野援助の為出征せんと其用意をぞなしたりける。

羽柴秀吉は、一隊を引率して、鷹通山を踰え、樫木山（今は愛宕山という）に城を築き四方に壁一重を塗り、白布三十反を松葉を焼きて煙に薫じさせ、種々の紋章を画き出して旗に擬し、是を城外に立並べたり。これは、敵に充分の威勢を示し降参させんが為の計略なり。又狭戸に滞陣せる宇野勢は、四月五日の夜、秀吉の川戸山を踰るをも知らずして居たりしが、秀吉の陣中を見渡せば、旗幟夥数立ならびて大軍加りたる様子に見えければ徒らに日を送りける。

或日敵の兵一人降参して云ふには、秀吉姫路より大軍を率いて下向したる翌夜、川戸山を踰え松山の陣には、僅五百余の軍勢に過ぎじと云ひければ、宇野方は早速兵を三組に分ち、其第一組は、春名修理光俊を左将軍とし、田路信濃貞政を右将軍とし、其勢総て三百余騎、第二組は西方の押手にして、宇野内匠行義を上将軍とし、小林三河重清を左将軍とし、同兵庫重安、同内匠重吉、岡城豊後吉一、同孫左ェ門貞年、同伝兵衛光宗等三百余騎、東方の押入は、宇野祓人祐清、内海多助義昌、長谷川五郎父衛安民を左右に従はせ、三方より押寄せたり。

敵軍松山の陣に於ても兵を三組に分ち、防禦に力を尽しける。西の方には、山田の一族、東の方は中村、北の方には中島に各百騎を引率せしめ、最後には石田が一族二百五十騎を率いて、何れにても弱き方へ味方せんと用

意して控えたり。西の手より戦い始まりて、春名、田路の両将は、各三百騎を引率して、敵軍山田の兵と追つ追れつ半時斗い戦い、後本陣へ逃げ入たり。小林等が勢三百騎にて掛合せ火花を散らして攻戦ひしが、中村勢は大に敗れ、本陣さして逃げ入りたり。北の方は、宇野祐清が勢四百騎にて中島勢百五十騎と喚き叫んで戦ひしが、祐清は諸軍と共に東西に奔馳し、急に戦ひを決せんとしければ、中島勢は大いに乱れ、本陣さして敗走す。祐清弥々勝に乗じて進撃し、第一陣にうってかかる。山田の勢は破られじと喚き叫んで防戦すれども遂に支ゆること能はざるを一戦に打破り、祐清は敵軍の第二陣に切入、竜驤虎奮の勢にて中村、中島の両勢をも打破り、益々進んで第三陣に攻かかり、石田の勢二百五十騎を喚き叫んで奮闘せしが、祐清の軍疲りたりけん石田の勢に打負けて長水城へと引退く。石田、山田、中村、中島等の敵勢は、秀吉の陣に馳せ加りける。

斯して宇野祐清は、十二日に長水城に引籠り本丸に於て酒宴を開きける。その宴席に連なりし人々は、宇野政頼、同右衛門督祐光、同政頼の二男蔵人祐清、同従弟安女正祐政、弄に宇野内匠其の外小林、春名、田路、岡城等にて、諸良従は、此宴席に出でず、各持口持口を堅めけり。此日本郡八御の者馳せ集り城内の軍勢三千余騎なりしとぞ。斯くて十二日の酒宴も止みたりしが、羽柴秀吉高家村（今の圧能村なり）に陣を布けりとの風聞城中に聞えければ、城内の諸将は、生谷村まで出張せり。即ち、上の瀬へは岡田、横治、中の瀬へは祐清、祐光、祐政、侍には横野、下村、内海、長谷川、下の瀬へは阿黒、岡城の両将なり。又軍使として小林戸兵衛重宗を跡より遣はされける。

闇斎神社奉納詩

桧垣賀陽

詠山崎闇斎先生　三首

信憑朱子不忘真　説道修身教導新
樹国興家学風盛　門生四集六千人

儒者常言無究源　独憂博識掩都門
真知実践人倫道　樹立嘉翁学説尊

和洋酒・食料品販売
八百福商店
山崎町山田
電話 ②〇四一三

愛レ人教道愛レ人尊　為レ国留レ心為レ国論
堪レ敬垂加神道説　学行万右貫二乾坤一

（訳　文）

朱子を信憑するも真を忘れず
道を説き身を修むるの教導新たなり
国を樹て家を興す学風盛んに
門生四集す六千人

儒者は言を雷いで源を究めず
独り憂う博識都門を掩うを
真知実践人倫の道
樹立せし嘉翁の学説尊し

人を愛して道を教へ人を愛して尊び
国の為に心を留め国の為に論ず
敬うに堪えたり垂加神道の説
学行万右乾坤を貫く

「註」賀陽先生は、吟詠の賀堂流中国本部長で、同流山崎篠の丸本部名誉会長を兼任せられている漢学者である。

巷説　続衣坂異聞

福井　託二

うつとうしい梅雨空の早朝、Aさんがヒョッコリ顔を見せて、いつかの話の衣坂地蔵さんのご本体を拝見に行こうと誘われて近くに祠ってある、五六年前に修築した御堂に行った。二人で三拝礼してから前扉を開けにかかったが錠前が靖ついて開かない。Aさんが家へ帰って懐中電灯と金槌とを持ってきてやっと開いた。勿体ぶって恐る恐る真正面の物体に目をこらした。それは石仏らしかった。布切れでほこりを払い掃除して見ると、緑泥岩の舟型石仏墓標である。その右隣りに江戸時代の手鏡が一つ立てかけられてある。それ以外何もない。石仏正面中央に地蔵尊像一体が半肉彫りに刻んである。右下に何か五六字彫り込んであるが磨滅甚しくほとんど読めない。この地蔵尊を祠った施主の名前が有ったらしい。そして左側上部から下に向って造立年らしい文字が彫ってある。上から天△五年△日とこれは割に分り易く読めた。然し天の下と年の下との二字がひどい磨滅で判読出来ない。Aさんと二人でためつすかしつ見ているうちに天の下の字あたりに下辺に一の線刻がかすかに痕跡が見とめられるので、天保、天明、天和、天正、天文と考えたがこれ

はどうしても天正であると決めたのである。時代を推理する上に軽卒めいたことと考えたがこの場合どう仕様もなかった。

天正五年は約四百年前である。安土桃山時代に入ったばかりで信長の中国攻めの構想が成り、ついで秀吉が播磨諸将の向背を調べて主君信長に報告のため安土城に帰参した年である。山村僻地の山崎地方も重大な岐路に立たされて人心の動揺も極度であったと思われる。むべなるかなこの天正五年から三年経った八年には播磨随一の要害長水城が落城の悲運に見舞われている。偖てその時から衣坂地蔵と云うのが有ったかどうかである。以前から古老にたづねても又文献らしいものも皆無である。地蔵尊の磨滅状態から見て当時の造作と見て良いと思うが、それにこの地蔵尊は居場所を三回程変えていられる。最初はここより北方百米の大神宮へ出る道である。その青蓮寺川を渡った坂の途中に南立北面して祠ってあった由である。この坂を衣坂とはその時分云っていなかったと思われる。二回目は明治初年に今の敷地より五十米程西上の坂の窪みの中に同じ南立北面で立ちおわしたようである。現在の御堂で祠ってから五六十年になると思う。幼い記憶におぼろ気に覚えている。それまでは長い間風雨に曝された露座仏だったのである。

衣坂の由来は江戸末期城下西光寺の院主さんがお相撲坊さんと渾名が通る程相撲ずきで、当時この今宿に住んでいた地相撲とりの若者が居り暇さえ有れば西光寺から馬にのってやって来てこの若者と取り組んで悦んでいた。決ったように取り組む前にぬいだ衣を坂の口にあった大きな青桐の下枝にかけて置くのが定めで青桐に白い衣がひらひらしていたらお相撲坊が来ているわいとすぐ知れたそうである。誰云うとなく衣坂の名前はそれから生れたそうである。考えて見ると衣坂と云う名前は案外新しいと思う。

因に新しい坂道も古い坂道も河東から山崎へ入るにも山崎から河東へ出るにも今宿にあった出石渡しと共に必ず通らねばならぬ道であったのである。それから又この石仏が下から二十糎上あたりで横二つに割れている。二三回の移転で割れたのかと思うが然らず石割れの由来についてもAさんの物語りが続く。明治初年頃今宿在に一

人の若者が居て若気の至りつい目と鼻の地獄谷と云う恐ろしげな紅灯の巷に迷いつづけたある晩おそく帰るさに坂の中程に来ると急に地蔵さんの線香の匂が鼻について上首尾の逢うた別れに抹香臭いは縁起が悪いと怒って抱きかかへ坂下の青蓮寺川に投げ込んだ。後になってある奇得者が勿体ないこと大罰あたり奴と拾いあげたらこのようにまっ二つに割れていたと云う話である。間もなく若者に大罰が当って一家離散の末路になったと云うことである。

今朝は早目の故かまだ一人の参詣人も見当らず、外聞を憚って無断開扉の大罰が当らぬようにと心をこめて二人前供養をはずんで、ぐずつきもようのお天気を気にしながら、又一度梅雨明けの上天気に調べ直そうと約束してAさんと別れた。

池田恒元家中人数帳（一）

慶安二年（一六四九）十一月十八日松井康映のあと宍粟郡山崎藩主となったのが恒元である。岡山藩主池田光政の弟、松平備後守と称し、郡内三万石を領した。しかし、寛文十一年（一六七一年）九月四日歿、このあと、政周、数馬と家をついだが若死して、恒元治政というべきは三十年で終った。歿落の後仕末は全部岡山藩で行ったので、当時の図面、文書類一切は、現在の岡山大図書館に保存されている。その内の「宍粟江戸両所に罷在候人数帳」という文書から役付きと氏名、石高を抜き書きしたのを紹介する。

一、千　石　家老役　宮野頼母
一、千　石　同　淵本弥兵衛
一、五百石　奉行役　村田九兵衛
一、五百石　同　完来六左ヱ門
一、六百石　鉄砲頭　奥山五郎兵衛
一、三百五十石　郡代役　多賀長太夫
一、二百五十石　鉄砲頭　桜井源兵衛
一、二百石　長柄頭　木原勘右ヱ門
一、百五十石　鉄砲頭　木原平助
一、二百石　同　松下四郎右ヱ門
一、二百五十石　裏判役鉄砲頭　大口十右ヱ門
一、百八十石　旗　平打与兵衛
一、三百十石　鉄砲頭　宮野角右ヱ門
一、二百五十石　同　綿織新兵衛
一、同　同　柏木九郎兵衛
一、三百石　鉄砲頭　青江忠兵衛
一、二百石　弓頭　村瀬三右ヱ門
一、二百石　書判役鉄砲頭　川嶋市兵衛

一、二百石　普請奉行鉄砲頭　村上　宗右ヱ門
一、百五十石　滝　九郎右ヱ門
一、二百五十石　江戸聞番役　佐々　宇右ヱ門
一、百五十石　横　目　勝見　左太郎
一、百五十石　同　松井　七右ヱ門
一、百五十石　同　久世　儀右ヱ門
一、百五十石　町　奉行　九鬼　平内
一、百五十石　同　中西　清右ヱ門
一、百五十石　郡　奉行　神屋　小右ヱ門
一、同　同　横井　宗兵衛
一、同　鉄　番　松本　善兵衛
一、百　俵　医者京都居申候　佐川　俊庵
一、百五十石　医　者　北村　三省
一、百　石　外　科　浅野　寿仙
一、百五十石　成田　長兵衛
一、同　馬　廻り　的山　松之助

新才会ピアノ教室

山崎町庄能一一九ノ一一
電話②三六八六

一、二百石　馬　廻り　妹尾治五右ヱ門
一、百五十石　右　筆　頭　生田　伊右ヱ門
一、同　馬　廻り　淵本弥三郎兵衛
一、百五十石　同　平野　五兵衛
一、同　同　萩野　十之丞
一、同　同　跡部　伝兵衛
一、同　同　大橋　彦兵衛
一、同　同　松井　△△
一、同　同　高木　宇兵衛
一、百　石　同　神尾　兵右ヱ門
一、同　同　松田　左太夫
一、同　同　斉村　四郎衛門
一、同　同　沢井　重左ヱ門
一、同　同　福嶋　三郎兵衛
一、同　同　釜内　安平
一、同　同　村田　長右ヱ門
一、同　同　梶川　猪之助
一、同　同　宮野　平之丞
一、同　同　真田六郎左ヱ門
一、同　同　木原　角右ヱ門
一、同　同　小野　七左ヱ門
一、同　同　伊藤　半左ヱ門
一、五十石　隠居　津田　宗休

一、百石　馬廻り　津田半助
一、同　安積村地侍　安積忠左ヱ門
一、同　馬廻り　西山善左ヱ門
一、同　大口孫助
一、五十石　有賀村地侍　中村九郎右ヱ門
一、同　真田孫兵次
一、拾五人扶持　牧野権九郎
一、五十石　岡井定右ヱ門
一、三十俵五人扶持　伽ノ者　河合祐的
一、二十五俵五人扶持　医師令　佐々木喜斉
一、三十俵三人扶持　中小姓　黒田浅右ヱ門
一、三十俵四人扶持　児小姓　黒定勘八郎
一、三十俵三人扶持　同　多賀理助
一、同　同　松下作之烝
一、三十俵四人扶持　同　片野忠助
一、同　同　近原小源太
一、二十俵三人扶持　同　錦織助之進
一、三十俵四人扶持　同　近藤源八郎
一、二十俵三人扶持　同　的山定之進
一、三十俵四人扶持　中小姓　山岡二右ヱ門
一、三十俵三人扶持　同　井野喜左ヱ門
一、同　同　竹内源左ヱ門
一、四十俵五人扶持　同　村田甚右ヱ門
一、三十俵四人扶持　中小姓　沢井金左ヱ門
一、三十俵五人扶持　同　木原忠右ヱ門
一、三十俵三人扶持　同　松下八太郎
一、二十俵三人扶持　同　多賀九郎五郎
一、二十俵四人扶持　同　生田源之烝
一、二十俵三人扶持　同　生田喜八郎
一、三十俵四人扶持　同　奥村藤五郎
一、三十俵三人扶持　同　松井藤十郎
一、三十俵四人扶持　同　谷内源右ヱ門
一、三十俵三人扶持　同　田中行兵衛
一、三十俵四人扶持　同　伴八太夫
一、同　同　小倉平左ヱ門
一、二十七俵四人扶持　同　川崎次兵衛

郷土だより

○秋の叙勲者本郡に二人――十一月三日の叙勲に本郡から左の二名が栄誉をえられました。

豊住昇治氏（八四）山崎町本町の弁護士さん。昭和十六年以来、裁判所の調停委員及び司法委員に選任され現在に至る功績のため、勲五等瑞宝章。

田中繁子さん（七二）山崎町三津、昭和二十二年以来婦人会役員として二十八年間尽力、地域婦人の生活向

上などに努力された功績、勲六等宝冠章。

○出版書籍――「播磨国山崎薬泉寺」というA五判横綴、三十二頁の冊子が高瀬住職の遺児高瀬明子さんによって九月一日編輯発行された。第一章沿革概要から七章まであり、写真三十余枚を組込まれている。

北林祐道氏（山崎町中広瀬）は八月に第四歌集として「類我集」を発刊された。歌誌「水甕」同人で歌歴五十年のベテラン。B六判百四十三頁、水甕叢書第二七六篇この出版記念会は、九月二十三日楠風閣で開催。

須介を世に疎まれて此所のみと拠る書斎にも陰日向あり

○歴史民俗資料館――明治二十年に建築された神戸地方法務局山崎出張所（登記所）の庁舎改築されるため、この貴重な明治初年の裁判所規格建物を復元保存するため、山崎町が払下をうけ、文化庁からの補助によって、民俗資料館として再生決定、その起工式が七月二十三日行なわれた。山崎小学校プールの東、旧校舎あとである。資料は可成り寄贈をうけているが、尚、有志者の寄託、寄附方を要望されている。

○闇斎神社祭典――山崎闇斎神社の秋祭りは山崎町八幡神社秋祭りの翌日十六日執行された。闇斎保存会、郷土会など、町有志代表者参列、正木芳隆氏外数氏の奉納朗詠があった。なお、奉賛詩吟剣扇舞大会は、当日下村記念館で各流代表者技を競い、終日賑った。

○町美術展――第十回山崎町美術展覧会は、十一月二日から四日迄山崎中学校体育館で開催。写真、日本画、洋画、書道、工芸の五部門に分れ、二百四十点の作品、毎年質の向上がみられ、左の者が入賞した。

△写真―町長賞衣笠正（山崎）教委賞塚本年春（姫路）美協賞松岡圭一（山崎）議長賞御陳乗太郎（太子）神戸新聞賞志水祐助（山崎）商工賞加藤五郎（姫路）努力賞田辺信雄、木谷吉秀（姫路）ライオンズ賞吉田覚（山崎）

△日本画―町長賞春名秀生、教委賞横野婦美子、美協賞青柳又次、議長賞片山吉恵、神戸新聞賞志水松男、商工賞伊藤鹿、努力賞青柳良、ライオンズ賞前田

寿美枝（山崎）△洋画ー町長賞高見竹寿（加古川）教委賞森本健一（南光）議長賞森竹健一（竜野）美協賞高田清二、神戸新聞賞稲村美哉子、商工賞藤原義弘、努力賞尾西和男（山崎）ライオンズ賞高田充吾（安富）△書道ー町長賞中原緋佐子（加古川）教委賞杉垣祥雲（安富）美協賞中村敏子（上郡）議長賞川添徳美（竜野）神戸新聞賞勝山剛（南光）商工賞山本成毅（上郡）努力賞高瀬咲子（姫路）後藤正則（山崎）ライオンズ賞井口昭子（山崎）△工芸ー町長賞中川鈴子、教委賞富和孝、美協賞藤家千代、議長賞大前幸子（山崎）神戸新聞賞山本貢（福崎）商工賞松尾勝子、努力賞大谷みよ（山崎）芳野俊通（新宮）ライオンズ賞友沢恭子（山崎）

おことわり

本年の見学旅行を実施しなかったことについては、全く申訳ありません。

見学計画委員におきましても種々骨折り願いましたが、見学地と自動車問題につきまして手落ちができ、ただただ謝罪するより外ありません。お許し下さい。

来春には、中国縦貫道路の開通が実現すると思いますので、見学地も従来より幅が広くなります。皆様の満足して頂く場所を選定しまして必ず実現したいと計画を練っていますので、その際は御賛同賜りたく御依頼申ます。

（安井　俊二）

本会総会予告

本会の総会を左のとおり開催します。但し、詳細日時など後日通知します。

一、日時　一月下旬

一、場所　菅山振興会館（旧長生会館）か老人福祉センター

一、議事

1. 事業決算報告
2. 事業計画
3. 役員改選
4. その他

一、行事

講師を招いて講演会、座談会開催予定